

# 文化

「博物館は貴重な資料と優れた人が集まることである」とは、兵庫県立人と自然の博物館(ひとほく)の岩槻邦夫館長の言葉である。貴重な資料が集まるというのは当然のことだが、優れた人が集まるというのはどういふことだろうか。

「ひとほく」に勤める三十七人の研究員は大学の

## 緑地帯

白川 勝信

研究者と同等に扱われており、大きな成果を挙げている。その一例として、年間数十億円と言われる県の鳥獣被害を減少させる意味がある。それは博物館の鳥獣被害対策が依頼されたのは、蓄積されてきた資料と研究員の資質を「優れた人」には、学芸員のほかにもう一つの町は全町域を対象とした自然学術調査を始めた。調査団には多くの非職業研究者も加わっている。どのメンバーにも、そのネットワークが必要だ(高原の自然館学芸員) 広島中・広島高)には芸北地域の地形・地質をまとめた実績がある。集められた資料は高原の自然館に展示される。ともに、観光や産業分野への活用が期待される。博物館に集う優れた人たちが、博物館や地域の価値を高めていく。

自然学術調査を始めた。調査団には多くの非職業研究者も加わっている。どのメンバーにも、そのネットワークが必要だ(高原の自然館学芸員) 広島中・広島高)には芸北地域の地形・地質をまとめた実績がある。集められた資料は高原の自然館に展示される。ともに、観光や産業分野への活用が期待される。博物館に集う優れた人たちが、博物館や地域の価値を高めていく。

### 博物館のチカラ ② 学術調査

研究者と同等に扱われており、大きな成果を挙げている。その一例として、年間数十億円と言われる県の鳥獣被害を減少させる意味がある。それは博物館の鳥獣被害対策が依頼されたのは、蓄積されてきた資料と研究員の資質を「優れた人」には、学芸員のほかにもう一つの町は全町域を対象とした自然学術調査を始めた。調査団には多くの非職業研究者も加わっている。どのメンバーにも、そのネットワークが必要だ(高原の自然館学芸員) 広島中・広島高)には芸北地域の地形・地質をまとめた実績がある。集められた資料は高原の自然館に展示される。ともに、観光や産業分野への活用が期待される。博物館に集う優れた人たちが、博物館や地域の価値を高めていく。

# 文化

本物の資料を保管することが博物館の使命だ。名画や彫刻、工業製品、動植物など、博物館にはさまざまな物が保存・展示されている。博物館活動を建物の中ではなく、現地でそのまま行うのがフィールドミュージアム(野外博物館)である。町並み保存



## 緑地帯

白川 勝信

や被爆建物の保存も大きくはこの範疇に入るだろう。展示の解説板や展示物を巡るためのマップが準備され、スタッフは展示物の保全や紹介を行う。広島県北広島町にある高原の自然館もフィールドミュージアムの拠点

だ。西中国山地の自然を保全しながら活用する目的で、島根県境に近い八幡高原に二〇〇一年、開館した。大きな展示室は少し足を延ばせば、臥龍山の山頂付近に残されたフナノ原生林にわく「雲霊水」や、八千年の歴史を持つ尾崎谷温泉へも簡単にアクセスできる。来館者の目的は館内の見学ではなく、野外にある自然を理解するための情報を得てから、フィールドに出て行くことにある。

フィールドミュージアムの活動は従来の博物館の活動と大きく異なるように見えるが、本物の資料を後世に伝えるという使命に違いはない。また、資料を整理し、研究して、学術的な裏付けのもとに活用するという手順も共通である。屋内、野外にかかわらず、博物館の実力が試されている。

「しらかわ・かつのぶ 高原の自然館学芸員」 広島県北広島町)

### 博物館のチカラ ① フィールドミュージアム

や被爆建物の保存も大きくはこの範疇に入るだろう。展示の解説板や展示物を巡るためのマップが準備され、スタッフは展示物の保全や紹介を行う。広島県北広島町にある高原の自然館もフィールドミュージアムの拠点

だ。西中国山地の自然を保全しながら活用する目的で、島根県境に近い八幡高原に二〇〇一年、開館した。大きな展示室は少し足を延ばせば、臥龍山の山頂付近に残されたフナノ原生林にわく「雲霊水」や、八千年の歴史を持つ尾崎谷温泉へも簡単にアクセスできる。来館者の目的は館内の見学ではなく、野外にある自然を理解するための情報を得てから、フィールドに出て行くことにある。

フィールドミュージアムの活動は従来の博物館の活動と大きく異なるように見えるが、本物の資料を後世に伝えるという使命に違いはない。また、資料を整理し、研究して、学術的な裏付けのもとに活用するという手順も共通である。屋内、野外にかかわらず、博物館の実力が試されている。

「しらかわ・かつのぶ 高原の自然館学芸員」 広島県北広島町)



# 文化

大学や専門機関が行った最新の研究のうち、一般市民に成果が報じられるのはごく一部である。自然史の分野でも、地道な研究ほどニュースになりにくいように思われる。それは、一つの研究を理解するためには、研究の背景にある膨大な事柄を体系的に理解しなければならないから

## 緑地帯

白川 勝信

博物館の役割は、そうした小さな新発見を、展示や書籍などを使いながら理解しやすい形に換えて、地域に伝えていくことにある。

たとえば、本城正憲博士(東京大保全生態学研究室)は日本全国のサクソウの遺伝子を調べ、

生育地に近いほど遺伝的に似ていることを明らかにした。この結果はサクソウという種が分布を早い時期に他から独立し、それは、美和地域のサクソウは他の地域には見られない特別の遺伝子を持っており、歴史的に早い時期に他から独立した。市民とのつながりは研究者にとっても貴重な。広島県を代表する鳥類研究者の一人、上野吉雄博士の研究には、八幡在住のアマチュアカメラマン藤原俊二さんの存在を欠かすことができない。(高原の自然館学芸員 広島県北広島町)

### 博物館のチカラ ④ 研究者と市民を結ぶ

# 文化

高原の自然館が開館する十年前の一九九一年、旧芸北町(現北広島町)に、地元の知識人や大学の教員、県内の生物教諭からなる十人の自然史研究者が集まった。芸北町教育委員会の事業として三年間にわたる総合学術調査を行い、芸北に残る自然の現状を把握するためだ。調査の過

## 緑地帯

白川 勝信

程で十一人の調査員が加わり、九六年には町内すべての脊椎動物の目録や、高原の変化が記載された調査報告書「高原の自然史」第一号が刊行された。調査メンバーは、現地調査が終了する九四年に西中国山地自然史研究会を発足させた。以来、自

然観察会を中心に活動を続けながら、情報交換や書籍の発行を行っている。その活動は、地元の研究活動から博物館が自然に対する町民の意識を高めることになり、芸北町が九六年に打ち出した長期総合計画には「全町自然博物館構想」が盛り込まれた。そして二〇

### 博物館のチカラ ③ 西中国山地自然史研究会

〇一年に高原の自然館を設立させることになる。市民団体が始めた調査組織、今日では千八百世帯が所属している。博物館と友の会は、地域の自然環境を記録し、後世に伝えていくという共通の目的のもとに、協同して活動している。芸北でも、西中国山地自然史研究会の活動で得られた標本などの資料は高原

の自然館に保存され、展示やガイドブックの材料として活用されている。現在、西中国山地自然史研究会の会員数は百十五人、高原の自然館が開館してからこれまでに会が開催したイベントは百十九回で、延べ二千六百二十二人が参加した。(高原の自然館学芸員 広島県北広島町)



# 文化

乱暴な言い方をすると、自然には自己回復できるタメージとそうでないタメージがある。たとえば、比婆山では、伐採されたフナ林が、約百年をかけてもとの姿に戻りつつある。百年前の伐採は、フナ林にとっては回復できるタメージだったといふことだ。

八幡高原の東側、霧ヶ

## 緑地帯

白川 勝信

谷にはまとまった面積の場の跡地を対象に、広島県と環境省を中心に進められた。温原には排水路が再生事業は、自己回復で掘られ、牧草を育てるた

### 博物館のチカラ

#### ⑤ 八幡湿原の自然再生

めに乾燥化された。牧場は八〇年代に閉鎖されたが、今も排水路は残り、

受け取った霧ヶ谷の湿原を再生する事業である。事業が行われる背景に、西中国山地自然史研究会と高原の自然館が開

催したワークショップが一度失われた命は二度と戻ってこない。科学技術が発達し、遺伝子の配列を読み取ることができるようになっても、人間には生命を作り出すことはできない。湿原の環境をつくることはできたとしても、そこに生きる生物までは作り出せない。

再生は、わずかも生物が残っている今、行わなければならない。草木を植えるのではなく、環境をつくり、生物が定着するのを待つのは、時間がかかることだ。継続調査や管理のために自然史研究会と高原の自然館の役割は大きい。(高原の自然館学芸員 広島県北広島町)

# 文化

農村文化と結びついた自然が、暮らしの変化とともに失われつつある。各地に見られた草原は、牛馬が使われなくなり、堆肥が化学肥料に代わっていくにつれて森林へと変わっていった。

北広島町の雲月山(九一二m)は放牧によって維持されていた草原の山だ。良い草を生やすために、一九六〇年ごろまで

## 緑地帯

白川 勝信

は、毎年春に山焼きが行われていた。放牧の停止によってやめた山焼きは、観光イベントとして九〇年代に再開された

### 博物館のチカラ

#### ⑥ 新しい農村文化

が、天候に左右されるイベントのために継続が困難となり、六年間焼いた後は途絶えてしまった。雲月山の草原生態系が

失われることは、地域にとつて大きな損失だ。高原の自然館のある人たちに、ボランティアとして山焼きをお手伝いすることを呼びか

そこで、高原の自然館の参加があり、二〇〇五年に山焼きが再開した。ボランティアの数は年々増えており、今年は一、百十四人が参加した。参加者のアンケートからは、山焼きの雄大さに対する感激のほかにも生態系を守る実感や、地元の人・ボランティア参加者との協働作業を通じての交流を喜ぶ声を読み取れ

た。農村の自然環境を楽しむ人たちが、主体的に農村生態系の管理にかかわっていく雲月山のスタイルは、まさにレスポンスフル・ツーリズム(責任ある観光)と呼べるものであり、田園風景を伝えていく新しい文化である。(高原の自然館学芸員 広島県北広島町)



